令和５年度第２回　市民活動・ボランティアサポートセンター運営会議　会議録

日　時　　令和５年１２月２０日（水）　16：00～17：40

場　所　　姫路市市民会館　５階　第 11 会議室

出席者　　委員７名　　事務局５名

（委員）　藤本 真里　座長　　米谷 啓和　委員　　三宅　靖子　委員
大西　麻衣子　委員　　中安　学　委員　　八田　友和　委員
本上　聖子　委員

（事務局）　市民参画部　平石部長　　市民活動推進課　門口 課長
市民活動・ボランティアサポートセンター　岸本 所長　吉田 係長　得平 主任

次　第

１　開　会

２　報　告

「ひめじ de ボランティア２０２３」について

３　議　事

登録団体等へのアンケートの内容について

４　閉　会

会議の進行記録（要約）

報告事項　「ひめじ de ボランティア２０２３」について

構成員：　私は家族と「ひめボラ市」に参加したが、非常に楽しかった。すでに出来上がっているコミュニティとかボランティア団体に入るのはハードルが高いので、「ひめボラ市」のようなイベントで様々な団体やその活動があると知ることができたという意味ですごくいいイベントだなと思った。ただ、会場ではのぼりを目印に移動される方が多いように感じたが、私も含めて地下のブースにたどり着けない方もいたのではと思う。

座　長：　「ひめボラ」ではどんな活動が人気だったのか。

事務局：　定員が少数のため受け入れ不可というところがあり、そういう意味では、定員３名に対して１０名ほどの応募になった子育てサロンのような活動が一番人気だった。

座　長：　「ひめボラ」体験をきっかけにその活動への参加につながったのは、たとえ数件だとしても、とてもいい反応だ。参加した団体の雰囲気が良くて、また行きたいと思われたのではないか。「ひめボラ市」も、広々した場所で賑わっている雰囲気が伝わってくる。

構成員：　この度、社協もボランティア体験者を受け入れた。参加者十数名のうち、継続になったのが２組。1 組は親子連れの方で、特に子どもさんが喜ばれてぜひ続けたいということで受け入れた。もう 1 組もすでにメンバーになり、最近開催した子育てのボランティア交流会にもスタッフとして参加された。ただ、受け入れ側の課題もあり、すでにできあがったコミュニティへの参加は非常にハードルが高いと感じた。今回の親子連れの受け入れも、団体側からは即 OK という反応ではなかった。また、別のグループでは、知り合いしか受け入れないと体験自体を断られたケースもある。「ボランティアが不足している」と言いながら、一方で「メンバーが固定しているから新規は受け入れない」と言う。社協としては団体に対して、人手不足という課題をどう解決するか考えてもらうよう促していく必要性を感じた。

構成員：　NPO 法人は基本的に開かれてる場合が多いが、ボランティア団体や任意団体は内向きのところもある。それを集団的孤立と言うそうだ。そういう団体が外向き

に開かれていくような働き掛けをするのもセンターの役割の１つかなと思う。

座　長：　閉じたいと思っている団体からすると、それも自由ではないか。むしろグループに所属しなくとも、新しい活動ができると次のステップをアドバイスするというサポートも仕方もある。

構成員：　閉じたいと言いながら、メンバーが増えないとか高齢で・・・という団体もある。社会と関わっている限りは、その活動が開かれていないと自己満足で終わってしまうように感じる。

構成員：　登録団体の中には、メンバーは変わらないが活動は継続しているというようなところもあり、そこが新しい方を受け入れる難しさは以前から感じていた。その中で、新しい人材を取り込むというよりも、その活動を引き継げるような新しい団体ができて、そこに古い団体がノウハウを教えるということができないかと思っていた。ある団体では、自分たちの活動に関する講座を開き、その受講者が新しい団体を作るようにサポートしているケースもある。

構成員：　「ひめボラ」の参加者のアンケートで、ボランティアは初めてという方が６割近くいたのは、大変良い結果だ。「ひめボラ」のプログラムも柔らかい印象のデザインで、広報が特に良かったのでこの結果につながったのではないか。また、様々な団体がメニューを出されていたということも良かった。

座　長：　活動証明書が目的の学生も多いようだが、それはそれで良いと思う。

構成員：　学生は主にどういう活動に参加されたのか。

事務局：　ゴミ拾いや、就職を見据えて福祉系の活動への参加も多かった。

構成員：　うちの団体も学生を受け入れたが、積極的な人もいれば後からついてくるような人もいた。その中でも一定数が継続してくれたらという思いはある。

構成員：　社協も学生を受け入れたが、ある社協支部の方はその学校に出向いて校長先生と話されたそうだ。学生は進学や就職で地域を離れることも多いので、個人に継続的な活動を望むよりもその学校の〇年生が継続して活動に来るという流れを作れたらよいのではと思った。

構成員：　ボランティア部がある学校と絡めていけたら良い。

座　長：　校長先生に礼状を送るなど、学校とのつながりが続くと良い。参加した学生の感想は聞いたのか？

事務局：　必須ではないので半分くらいの回答率ではあったが、アンケートをとった。

座　長：　活動証明書が欲しいという学生にはアンケートの回答は必須ということにしてもよいのでは。経験上、ポーカーフェイスな学生でも、アンケートを見るとそういうことを考えていたのかと驚くことが多い。書くことでその活動や体験を振り返るという意味で、学生にとっても良いことだと思う。あと、この事業で何か困ったことはなかったのか。

事務局：　１６３名と予想以上の応募があったので、「ひめボラ」はマッチングするのが大変だった。そんな状況にも関わらず、参加者の事前情報が欲しいという受け入れ団体も複数あった。申込時に項目が増えすぎると応募の敷居が高くなるので、その項目を盛り込むのは躊躇する。団体から参加者に事前にコミュニケーションを取っていただきたいのだが、そのあたりが次年度の課題だ。

構成員：　私の団体の場合は、こちらから参加者に電話して事前のやりとりをする中で、ある程度参加者の情報も得たが、それをしていないということか。

事務局：　事前説明会なしという団体もあったので、そういうやりとりもなかったのではと思う。

座　長：　参加者の連絡先を事前に教えていても、慣れていない団体は事務局を通して連絡しないといけないと思っているのかもしれない。そのあたりを事前にアナウンスすると良いのではないか。

構成員：　私は学校で学生のボランティア活動の担当をしているが、姫路城マラソンのように学校単位で申し込みができると学生にも勧めやすい。学校がとりまとめて申し込むのならば誰が申し込んでいるのかも把握できるし、１人が申し込むとその友人たちもつられて参加する。実際、姫路城マラソンではわが校は毎年 100 名単位で申し込んでいる。

座　長：　紙ベースでのやりとりは手間なので、学校長あてに申し込みフォームをメールで

やりとりできると良いのでは。

構成員:　以前からイベントをするなら姫路駅前が良いと提案していたので、それがこの「ひめボラ市」で実現してうれしく思うし、良い成果が出たと思う。今回の「ひめボラ市」と、10 年以上開催していた「ひめじおんまつり」との比較分析が必要なのではないか。例えば、参加団体数やアンケート結果もそうだが、場所が変わったことで参加団体の種類や、出展内容の変化などの分析することで、それを受けて来年、第 2 回の「ひめボラ市」につながっていくのではないかと思う。

事務局:　参加団体数は少なくなっている。その理由は、初めてのイベントなのでどういう内容で参加するのが良いかと躊躇されたり、今回は積極的に物販 OK、有料体験 OK という方針だったので、その趣旨に合わない団体が参加されてなかったのではと考えている。ただ、場所の都合で出展数としては今回ちょうどよい数だった。増やしたい気持ちはあるが、あまり増えると配置が難しく雨天時の対応ができないということもあるので、結果的に良い数だったと思う。ただ、場所が離れていたので一体感がなかったというのは来年度の課題だ。

構成員:　にぎわい交流広場の 3 か所と、交通広場の計 4 か所を利用したようだが、ここはそれぞれ違うイベントをしていても干渉しあわないというメリットがある反面、すべてを使うと一体感がないというデメリットもある。それは、例えばスタンプラリーや、マップ、あと先に意見が出たが、のぼりを立てることで自然に誘導することもできる。

座　長:　のぼりが少なかったことが地下への誘導につながらなかったということがあるのかもしれない。

事務局:　後日、ある団体に聞いたが、地上を通る方の多くは市外から来た観光客で、地下を通る方は姫路市内の方が多い。それゆえに、地下で良かったという意見もあった。たとえば乳がんの啓発をされている団体は、一度通り過ぎた市民の方が体験させたいと娘さんを連れて再訪されたそうだ。次回のブース割り当てはそこも意識しないといけないと感じた。あと、のぼりの設置は努力したが、人手不足で思うようにはできていなかった。

構成員:　今までの実行委員会形式から今回センター主催での開催ということだが、ボランティアは何名だったのか。

事務局：　当日のみで２２名の参加だった。

構成員：　実行委員会のように企画からということではなかった分、事務局の負担も大きかったのではないか。

構成員：　参画したい団体もあるかもしれないので、次年度は、そういう要素も取り入れると良いのではないか。

事務局：　新規事業ということで、事務局の段取りが悪くあたふたした。来年度からはもう少しうまくいくと思うが、今回は反省点が多かった。

座　長：　あらかじめ参加団体にのぼりを送り、朝ののぼり設置の手伝いを依頼し、広報も積極的に自らしてもらう。イベントを続けていくためにはそういった協力を求めることも大切だ。また、東京都世田谷区の環境系のイベントでは、事務局が大量に用意した竹を団体が取りに来て、自らそれを資材としてテント設営するという取り組みをしている。環境を意識したイベントなので、廃材となる竹を活用することに意味を持たせている。「ひめボラ市」も回を重ねていくとともに、姫路市がすべておぜん立てするのではなく、ボランティアポリシーにのっとり参加者が自立することを意識したイベントにするのも良いのではないか。

構成員：　以前、「ひめじおんまつり」の実行委員会に参加したが、実行委員会側が事務局に頼り切っていた。今回の交流会でも、まだ事務局にこうしてほしいとか、広報をもっとしてほしいなどといった要望が出ていた。もっと団体側が自ら何かすることを意識しなければいけないと感じた。

構成員：　複数団体で共同運営するようなブースを作ると、そういう意識が芽生えてくるのかもしれない。

座　長：　「ひめじおんまつり」も最初はもう少し自立していたが、回を重ねるごとに事務局への要求が高まっていた。事務局側が予算を握っていたことで、要求する側とされる側という関係性に陥っていたのではないか。実行委員会が予算を持つことで、自分たちで考えて運営するという自立した形になっていたように思う。

構成員：　「お城まつり」では協賛企業があるが、「ひめボラ市」でそれは可能か？

事務局：　「お城まつり」は姫路市単独の主催ではなく、様々な企業や団体が協働で開催し

ているので可能だが、「ひめボラ市」は市の主催なので難しい。

構成員：　CSR として人材を出す代わりに、協賛金などでイベントを応援したいと考える企業もある。運営に参画するスタッフが自分たちのイベントでやりたいことを実現するために、協力をお願いするという形もあるのではないか。

座　長：　むしろ姫路の企業で働く方に、「ひめボラ市」に来て楽しんでいただくのが良いのではないか。

構成員：　姫路市内の企業で作るボランティアネットワークがあったのでは？

構成員：　社協が事務局の「姫路企業ボランティアネットワーク」という組織があり、現在20 数社が参加している。

構成員：　参加者は高齢者が多かったのか、現役世代が多かったのか。

事務局：　特に高齢者に偏っていたということはなく、若い世代から高齢者までまんべんなく参加されていた印象だ。また、「ひめボラ」では同じ会社のグループでの申し込みもあった。

構成員：　今回の「ひめボラ市」では、「ひめじおんまつり」と比較して初めて一般の方にも開かれたイベントだった。もちろん、「ひめじおんまつり」も一般来場者を歓迎していたが、施設の中で開催していたので団体の知り合いという方がほとんどだった。今回は、姫路駅前というオープンなスペースで開催したことで通りすがりの方が立ち寄ってくれた。また、「ひめボラ」は学生対象の夏ボラの拡大版として企画されたものが、これほど社会人など多くの参加者があったということで、どちらも今後につながる良い企画になったのではないかと思う。

構成員：　「ひめボラ」で受け入れる側にも課題があったという意見が出たが、私の団体に来た方々が今後も活動に参加したいと言われたら、どう答えたかと考えてしまった。「ひめボラ」の参加団体募集の趣旨をはっきりと覚えていないが、その時に今後の活動にも継続して参加する方を見つけてみませんかといった趣旨がもう少し強調されていれば、それを意識して参加する団体もあるのではないかと思う。それが良いか悪いかというのは、一概には言えないが。

議　事　　登録団体等へのアンケートの内容について

座　長：　団体用のＱ６、人材についての問いだが、どの団体でも高齢化や運営スタッフが少ないという課題があるということは予想できるので、この課題について今後どうしたいかという発展的な質問にした方が良い。例えば、イベントで PR したいとか、他の団体と活動でつながりたいとか、もう団体活動を終わらせたいとか。また、「ひめボラ」や「ひめボラ市」を意識した、体験者を募りたいとかそういった設問の仕方も考えてはどうか。

構成員：　まず、言葉の整理になるが、Q6 の設問にあるのは課題ではなく問題だ。例えば、メンバーの高齢化というのは問題で、それから考えられる課題とは若い世代の加入ということになる。問題から課題を導きだしてその課題を解決する手順が必要だ。

座　長：　課題解決につながる選択肢としては、運営スキルを磨く講座に行きたいとか、メンバーに行かせたいとか。駅前のような場所で体験ブースを出してみたいとか、学校とつながりたいとか、あるいは解散したいという選択肢もあってよいのでは。

構成員：　連携交流の設問があるが、これはセンターの目標の一つか？

事務局：　目標の１つにしているが、実際のところ、団体側が連携交流についてどう考えておられるのか、もしかすると一方的にセンターが押し付けているだけではないのかと思い、設問に加えた。また、うまく連携交流している団体の事例がわかれば、他の団体への助言としてお伝えできることもあるのではないかという思いもある。

構成員：　兵庫県では HYOGON というネットワークがあり、連携交流に熱心だ。ただ、その集まりは神戸や事務局がある加古川が中心だ。

構成員：　NPO 法人の集まりとなると神戸が中心になってくるが、最近は播磨地域での会合なども増えてきた。連携することで様々な情報を得られ、お互い足りないところを補えるというメリットもある。

構成員：　私自身は、30 代、40 代の少し若い世代と連携して、次の世代に活動をつなげていきたいと考えている。私たちの活動は地域を絞って自治会とも連携してエリアマネージメントをしているが、子供会の活動を通して参加していた 30 代 40 代が、子供の卒業を機に参加しなくなることが多い。それをどうつなぎとめて、より良

い地域を作るかということが課題になっている。

座　長：　どういう交流がしたいのか？という聞き方の方がより良いのかもしれない。若い人との交流とか、同じ地域で同じような世代との交流とか、行政との交流とか、イメージが湧きやすいのではないか。連携交流に関連して、今回は「ひめじ de ボランティア」の交流会を事業の後に開催したが、「ひめじ de ボランティア」に参加した方々に次年度の事業の募集前に集まっていただいて交流会で意見を出してもらうというのはどうか。

構成員：　たしかに、事業の前に交流会ができたらよかったという意見もあったが、何度も交流会をするのは事務局の負担になるかもしれない。

構成員：　たとえば、この参加者同士のライングループを作るのはどうか？私の団体がイベントをするときに、事務局やイベント参加団体 50 名ほどでグループラインを作り、そこで事前打ち合わせや情報共有をしたが、わざわざ集まる必要もなくなり、大変便利だと感じた。

事務局：　それができたら便利だという話もしていたが、市がグループラインを立ち上げるのは難しいという結論に至った。

座　長：　では、関心のある団体に自主的な形でしていただいてはどうか。参加も強制ではなく自主的な形で。

座　長：　連携交流の設問が少し漠然としているのかもしれない。また、すでにしっかりと連携交流している団体からすると、多くの事例を書きだすのも大変かもしれない。あと、Q１３で「ひめじ de ボランティア」に参加しなかった団体への設問で、選択肢の「興味がなかった」とか「メリットがないと感じた」という表現は少しきつい印象を受ける。そのイベントの主催者からのアンケートに対して、その回答は選びにくいのではないか？

構成員：　参加しなかった団体は理由を書けるが、参加した団体にも書ける設問も必要ではないか。また、活動継続で困ったことを書く項目もあるが、継続して良かったことも書けるようにすると良い。

構成員：　たしかに、センターとしては、悩みに答えたいという思いがあるかと思うが、回答する団体からすると泣き言ばかり書くことになる。

事務局：　活動を継続していく上で良かったことというのは取り入れたいが、「ひめじ de ボランティア」参加団体への設問については、実施後のアンケートで既に答えていただいているので、あえて外している。

構成員：　Q５の資金に関する課題についての問いがあるが、課題があると具体的に書いたら、何か支援があるとか、どこかにつなげてもらえるのか。

事務局：　センターが補助金や助成金の予算を持っていないのと、このアンケートの回答は無記名なのでつなげていくのも難しいが、助成金情報の発信をしているので、どういう活動の助成金が必要なのかということを知って、活かしたいと考えている。

構成員：　活動団体として聞きたいのが、どういう形で団体のイベントや活動の情報を発信して成功しているのかというところだ。また、発信のツールとして新聞社が情報を求めているときもあるので、そことマッチングできたら良いと思う。

座　長：　それでは、議事については終了したが、何か他に意見やお知らせなどあればどうぞ。

構成員：　クラーク高校の芦屋キャンパスと姫路キャンパスの両校の生徒が阪神淡路大震災の聞き取り調査をして冊子にまとめた。もうすぐ震災から 30 年になるということと、本校に東日本大震災のときに福島で自ら被災した教員がおり、防災部を立ち上げて活動している一環で作った。阪神大震災で被災された方と、現在クラークの教員で当時避難所担当をしていた方々を中心に調査している。

構成員：　姫路商工会議所の都市まちづくり委員会と兵庫県立大学の共催で、システム思考という考え方と、セオリーオブチェンジの入門講座セミナーを開催する。地域や企業の課題解決や組織運営の仕方に役立つ手法が身につくので、興味のある方は是非参加していただきたい。